■ 論　文

江戸期の商人精神と企業家精神の生成に関する考察

小見山隆行

目　次

Ⅰ　はじめに
　1　商業経営者の誕生時期
　2　企業家精神の概念
Ⅱ　江戸期の商人精神の生成
　1　寺子屋教育にみる人間教育
　2　商人教育を担った商業徒弟制度
Ⅲ　江戸期の商人精神を唱導した人物
　1　井原西鶴が唱導した商人精神
　2　石田梅岩が唱導した商人精神
Ⅳ　商家の家訓・店則から読み取る商人精神
Ⅴ　近江商人にみる商人精神
　1　近江商人の心構え
　2　近江商人の「三方よし」の精神
Ⅵ　企業家精神の生成と唱導した人物
　1　商人精神から企業家精神への転換
　2　福沢諭吉が唱導した企業家精神
　3　渋沢栄一が唱導した企業家精神
　4　両者の企業家精神の異同
Ⅶ　むすび

▶ 要　旨

今日のわが国の企業社会の諸問題を検討する場合，歴史をさかのぼり考察することは有意義である。それは，現代企業においても，江戸期からの商人の行動原理が埋め込まれ，企業文化を形成している場合が多いからである。本稿では，大別して二点について考察する。第一は，寺子屋教育，商業徒弟制度，家訓の訓え等の商人精神への形成の関わり，商人精神を唱導した人物と商人観の現代的意義の考察である。第二は，明治期に入り，近代的企業の担い手にふさわしい新身分の創造に貢献した福沢諭吉と渋沢栄一を取り上げ，彼らの進取的企業家精神について若干の考察を試みる。

▶ キーワード

商人精神，企業家精神，寺子屋教育，商業徒弟制度，家訓，都鄙問答，三方よし，士魂商才，義利両全，道徳経済合一論

Ⅰ はじめに

1 商業経営者の誕生時期

近年のわが国企業においては，偽装，詐欺，インサイダー取引，株価操作をはじめとする刑事犯罪行為などの不祥事の多発など，道徳観の欠如の例をあげるに事欠かない。商取引の公正性や公共的倫理性を弁えず，あるべき商業道徳を踏み外し，目先の私的利潤の追求に奔走する行為は，企業の社会的信頼を大きく揺さぶる要因である。

商人の活躍した江戸期にあっても，不正な行為や悪徳商人は数多く存在していたし，明治以来の資本主義の興隆期にも，会社組織体をめぐる不祥事はしばしば見られたところであるが，昨今ほど社会的に一般化された現象ではなかった。今日の現象はわが国の企業者層の社会的自覚の欠落に根ざすものといっても過言ではない。

昔から商売繁盛のためには社会の信用がなければならないことは商業の基本である。企業にとって重要な利害関係者の一つである「顧客」からの信用をなくしては，企業の存在が成り立ち得ないことは論をまたない。資本主義は厳しいモラルがあってこそ，正常に機能するものである。

江戸期における商人の行動原理は，正直，倹約，勤勉が強く説かれ，商業道徳（今日の「企業倫理 business ethics」）とか，公儀のお達しの遵守（今日の「法令遵守 compliance」）は，伝統精神として極めて当たり前のこととして扱われていた。

今日の多発する企業不祥事を見るにつけ，営利行為に伴いがちなモラルハザード（倫理観の欠如 moral hazard）を防止するには，江戸期の商人の堅実な生き方・正直，倹約，勤勉と禁欲の精神などが再度見直されるべきではないかと考える。

現代の企業においても，江戸期からの商人の行動原理が埋め込まれ，それが企業文化を形成している場合が多い[1)]。そのため今日のわが国の企業社会の諸問題を検討する場合，その根源を探るために歴史をさかのぼり，ビジネスが確立した江戸期まで振り返ることは有意義なことと考える。

では，本格的な経営とか企業家はいつの時代に起こったと理解すべきか。企業家概念はいつの時代に形成されたとみるべきかの議論がある。

土屋喬雄教授は，経営史研究の先達である米国ハーヴァード大学のグラース教授およびラーソン助教授の共著『米国経営史のケース・ブック』(N.S.Gras,Henrietta M.Larson,『Casebook in American Business History』，1939) の中の「経営は都市に起こり，そして田舎に拡がった。それは，交換手段及び信用単位としての貨幣の使用により特徴づけられる。それは価格経済のうちに成立し，繁栄する。」という見解を支持し，本格的にして純粋な経営という事象の成立するのは，商品流通に伴って貨幣経済が普及し，商品・貨幣経済が一応成立してからであるととらえる。わが国の歴史上，一応本格的かつ純粋にみての経営の起こったのは，商品流通に伴い

貨幣流通が全国的に普及し，全国的規模での商品・貨幣経済が一応成立し，封建的統一ではあれ，一応，全国的，政治的統一が形成され，治安も全国的に確立した江戸期にあったと指摘している[2)]。

わが国の企業家精神の生成についての史的考察を行う場合，筆者は，江戸期にはじめて本格的で純粋な経営者が現れたとする学説を支持し，江戸期の商人精神を含めて考察すべき立場をとっている。

2　企業家精神の概念

企業家精神[3)]を考察するにあたり，概念づけを明らかにしておく必要がある。企業家精神は日本固有の言葉ではない。英語の entrepreneurship の訳語である。

企業家精神の内容は著者によって解釈がさまざまである。今日では，企業家と企業家精神という二つの言葉は混乱の極にあり，特に定説はみられない。

一般に，企業家精神とは，「つねに進取の態度をもち，自らの危険負担において，絶えず積極的な革新をもたらしていく機能ないしは個人特性」といわれている。

ドラッカーは，『イノベーションと企業家精神』の中で，「企業家たる者は，何か新しい異質のものを創造しなければならない。変化をもたらし，価値を創造しなければならない」と指摘している[4)]。

シュンペーターは，「企業家の特性として，危険負担者 (risk bearer) であること，生産要素の新結合をはかることの機能面を強調すると同時に，進取 (initiative)，権威 (authority)，先見 (foresight) などの個人的特性ないし性格も強調する。すべての人は新結合を実行する限りにおいて企業家であり，彼の仕事を確立してしまうや否やその性格を失うもので，長続きするものではない」と述べている[5)]。

清水龍瑩教授は，「企業家精神とは，不連続的緊張を自ら作り出す能力であり，変化する環境を素早く洞察し，自らの危険負担において，絶えず新しい要素結合を意思決定する能力である」と定義している[6)]。

中西寅雄教授は，「経営者はつねに共同社会における企業の永続的な維持発展をはかるために，生産における経済性を増進せしめるとともに，その成果を経営社会の構成員たる利害関係集団に分配する・・」と経済性の追求と企業家の機能の中に社会的責任を包括する見解をとっている[7)]。

近代組織の創始者であるバーナードは，「組織の存続は，それを支配している道徳性の高さに比例する。すなわち，予見，長期目的，高遠な理想こそが協働を存続する基礎なのである。かように，組織の存続はリーダーシップの良否に依存し，その良否はそれの基礎にある道徳性の高さから生じるのである。」「道徳性が低ければ，組織は短命である。道徳性が低ければリーダーシップが永続せず，その影響力がすみやかに消滅し，これを継ぐものが出てこない」と述べて

いる[8)]。

筆者は，企業家精神を「つねに進取の態度をもち，自らの危険負担において，たえず積極的な革新的行動をもたらしていく機能ないし個人的特性をいい，その根本精神において，単なる利潤動機だけで行動する経営主体ではなく，高い倫理観，公益観を兼ね備えたものでなければならない。」という概念づけを試みた。筆者は，企業家には，つねにその根本精神に倫理観，公益観を備えていなければならないという見解をとっている。

本稿では，筆者の企業家精神の概念を踏まえ，以下，大別して二つの分野について考察することとする。第一は，江戸期の商人養成の基礎をなした寺子屋教育がめざしたものは何か。商人教育としての丁稚奉公制度，商家に遺された家訓の訓えなどは，商人精神の形成にどのように関わっているのか。商人精神を唱導した人物と商人観の現代的意義についての考察である。第二は，明治期に入り，近代工業化政策として殖産興業，富国強兵，西洋の科学技術・近代的諸産業の移植等にあたって，担い手の企業家に何が求められ，伝統的商人精神から近代的企業家精神への転換がどのように行われていったか。商人精神から企業家精神の思想形成に関わった福沢諭吉と渋沢栄一をとりあげて若干の考察を試みた。

Ⅱ　江戸期の商人精神の生成

江戸期における商人のための教育システムは，大別すると，寺子屋教育と商業徒弟制度の二種類に分けることができる。これらの教育システムは，商人教育しいては商人精神を育む上で大きな役割を果たしたと考える。

1　寺子屋教育にみる人間教育

寺子屋教育の歴史は古く，すでに平安時代から行われていたといわれる。広く普及しはじめたのは，商人階級が発達した江戸期に入ってからで，享保期の頃から増加し，文化，文政，天保期には激増するに至っている[9)]。江戸期には義務教育の学校は存在しないので，当然，寺小屋で学ぶか否かは，子どもや親の自由選択であった[10)]。寺子屋で教える教師を師匠と呼び，師匠の多くは僧侶，神官，医者，浪人等であった。寺子屋は，江戸では普通「手習所」と呼んでいた。また，寺子屋で学ぶ子どもを寺子と呼んだが，江戸期後期には筆子と呼ぶのが通例であった[11)]。

筆子の年齢は６～７歳から12～13歳であった。寺子屋で授けられたものは，習字，読書，作文，修身，算盤等の基礎教育であったが，規制の厳しい封建社会で庶民が生きていくために必要な知識や生活の知恵でもあった[12)]。師匠には，読み書きの前に，人としての礼儀作法を躾けなければならないという強い使命感があった。掟書（校則）[13)]に反する児童に対しては，厳格な態度で臨むのを常とした。「礼儀なき子どもは読み書きを学ぶ資格なし」というのが師匠の鉄則であった。通常，筆子は，朝早起きして顔を洗い，お天道様を拝み家のご先祖様を拝み，父

母に挨拶の礼をして朝食を食べ寺子屋に出かける。教場に入るや正座して畳に手を付いて額をさげて心を静め，深く礼をしてから席に着く。来客への応接，接遇も重視された。教場内の秩序は厳しく，大声をあげたり，連れ立って大小便，抜けだしは厳禁であった。清書したら直接師匠に出し，手直しを受ける。帰るとき，師匠に対面，挨拶は欠かせない，筆子仲間の友情，助け合いが求められる。また，筆子の喧嘩に親は口を出さない，師匠に任せる。親の干渉を許さなかった。当時は，教育という営みを「聖業」とみなしており，「７尺さがって師の影をふまず」の言葉どおり師匠の尊厳は絶対であった[14]。筆子は，ひとりの師匠から手とり足とり教えられるのであるから，その師匠からうける人格的な影響は計り知れないほど大きかった。

筆子仲間は，筆子中を結成して師匠の徳を偲び恩に報いんと，死後，顕彰碑や墓碑を建立し，墓石の中央に筆子中と刻んだ。総数は確認されていないが，万単位に達するといわれる。商家の筆子の教科書としては「商売往来」などを使用し，商取引・貨幣金銀銭の両替につづき，あらゆる商品の名を列挙し，最後は商人たるものの道徳「正直」で締めくくることが多かった[15]。「商売往来」に見られる生活規範の教育には，良き町人として自らを鍛え上げ，質素かつ真面目な商人として生きていくことを説いていることが特徴である[16]。

江戸期商人の教育的基盤としての寺子屋は，知識や技能の面での役割は決して大きくなかったかも知れないが，まず商人の前に，一町人として，一人間として大切な正直，礼儀，感謝，報恩，孝行心などの道徳的徳目を育む教育システムとして，大きな役割を果たしたといえる。

寺子屋教育の普及[17]は，明治維新後，近代社会の発達に貢献し，新しい西欧文明を吸収する意欲を生み，一方，寺子屋の師匠や建物の存在自体が近代学校教育制度の発足を容易にさせるものであった[18]。寺子屋が小学校の前身とみなされる理由の一つである。

２　商人教育を担った商業徒弟制度

商業徒弟制度は，中世の「座」，近世の「株仲間」の中において起こり，江戸期に入ってから飛躍的な発展を遂げた。商家は営業規模を拡張するにあたり他家の次子以下を年季奉公の徒弟として吸収し，商業徒弟制度として定着させていった。これは雇傭制度であると同時に商人養成のための訓練システムでもあった[19]。

一般に，商家における奉公人には丁稚，手代，番頭，別家，親類並という段階があり，この段階は習練段階といえるが，年功階梯的昇進の制度でもあった[20]。

丁稚から手代に至る奉公人の見習い期間は，わが国独自の商人教育の期間であったといえる。丁稚は，商家のもとに住み込み，食事と新年や盆に着物を貰う以外賃金は一切支払われず，着物や小遣いは親からも仕送りして貰うのが普通だった。

丁稚の場合，番頭，手代が教育者として，仕事の現場で鍛え上げる形がとられた。先輩から読み・書き・算盤や四書五経の儒教教育など基礎的素養を中心に習い，さらにすすんでは手代の仕事を手伝うなかで，記帳，仕入，販売，接客，店員としての生活態度などの実地訓練にい

たるまで，日常生活のなかで仕込まれた。口の利き方，頭の下げ方，包装の要領や目方の計り方，貨幣の良し悪しや掛売り相手の判断，量目不足や同業者の申合わせ違反に対する制裁等について学んだ。彼の日常は掃除や使い走りに明け暮れた。それは辛いことと覚悟している生活であって，その辛さが教育的効用であるとされていた[21]。

手代になってから，より責任ある業務を担当させられ，商品の仕入れや販売から，出納や記帳などの会計に至るまでの専門的な能力形成がはかられた。奉公の年季が終わってから最低5年位は，「お礼奉公」をするのが普通であった。特に有望なら番頭に取り立てられたり，「のれん分け」をして貰って独立することもあった[22]。

商家の当主と丁稚・奉公人との関係は，憐憫・慈愛と忠誠・忠孝の倫理が特に強調されていた。主従関係としてはもとより，親子関係，家族主義的奉公関係であったといってよい[23]。

Ⅲ　江戸期の商人精神を唱導した人物

江戸期の文献中もっとも早く商人精神を体系立てて記したものは，寛永4年（1627年）に書かれた『長者教』という小冊子といわれる。金持ちになるための訓話集である。致富の方法として勤勉・節約・才覚・分別・正直を説いているが，江戸期初期の商人精神の倫理的・道義的バックボーンといえる[24]。

1　井原西鶴が唱導した商人精神

井原西鶴（1642～1693年，以下西鶴という）の町人物の代表作『日本永代蔵』（1688年刊）は商業資本・金貨資本の蓄積の仕方に焦点を置いている[25]。

彼の人生観の中核にあるものは，神仏の信仰に儒教の倫理を加味した道義的信念といえる。金銭を重要視すべきことを説いているが，決して利潤追求・資本蓄積を人生最高・至上の目的と訓えてはいない[26]。

正当なる利潤追求・資本蓄積を成就するには，「才覚」と「算用」によって，商業利潤の増大をもたらすことができ，得た利得を「始末」によって蓄積することが，「分限」を作り上げる原因だと考える[27]。

彼のペンネームは，才覚をもじったとさえいわれる。才覚とは，商業への強い意欲と，その意欲を実現することのできる知恵を含んでいる。前者に重点を置けば商魂となり，後者に重点を置けば商才となる。見方によっては，知恵，発明，手だれ，弁舌，駆引き，愛嬌，工夫など一切の商才がこの才覚に含まれる。近江商人の逸話にあらわれる，すばやく抜け目なく商機をつかみ，機先を制して実行に移すというような力量も，才覚の中に含めることができる[28]。『日本永代蔵』巻1の中で，三井家開祖，三井八郎兵衛高利につき，「商売に油断なく，弁舌手だれ，智恵才覚，算用たけてわる銀をつかまず」といっている。才覚と算用とは結びつき，さらに勤勉力行を加えて商才をなすとしている。「現銀安売掛値なし」の才覚は抜群，「大商人の手

本なるべし」とも述べている[29]。さらに巻4の中で,「人は正直を本とする事，是神国のならはせなり」と，商人は，仁義，正直を以て根本としなければならぬ立場をとっている。

西鶴以後に商人精神を論じた代表的な人物に，西川如見（1648～1724年，以下如見という）がいる。1719年，『町人嚢』を著し，儒教倫理をバックにして，町人の「分限」,「勤勉」,「貪欲・不仁・謀計・不正利得の否定」,「簡略質素」などを説いている。如見は，正しい商人の在り方を「商人と屏風は曲まねば立たず」と表現している。商人も，正しい心を以て善根を積むことが肝要であるとし，筋正しき商人道をすすめている[30]。中世以来，無数の商人らによって商人の道が追求されてきて，そうした積み重ねが元禄期の西鶴，如見を経て，次節の石田梅岩やその門人らに影響を与えていったものと思われる[31]。

2　石田梅岩が唱導した商人精神

江戸期おいて,西鶴,如見らに続いて商人精神を唱導した代表的人物が石田梅岩（1685～1744年，以下梅岩という）である。四民は皆それぞれの職分をもって，君が天下を治めることを助けるという意味において，職分の平等を説き，商人の売利は武士の家禄と対等の性格をもつことを主張した。

職業自体に貴賤の差はないというのが梅岩の主張であった。福沢諭吉も，明治6年に著した『帳合之法』において,「物を賣買製造するも商賣なり，武家奉公も商賣なり」「然るに世の人皆武士，役人の商賣を貴く思ひ，物を賣買し，物を製作する商賣を賤くし思ふは何故ぞ。畢竟商賣を貴き学問と思はざりし心得違なり」と梅岩と符節を合わせる見解を述べている。

主著『都鄙問答』（1739年刊）は,「石門心学」の経典とされるもので，4巻から成り，士・農・工・商・儒・医などにそれぞれの道があることを説いている。主として孔孟の教えをバックボーンとし，神・儒・仏三教一致説といわれる。門弟により祖述され，維新以後にまで至っており，その間，彼の根本理念が修正されたことがない[32]。

現代においても，日本の経営の道，ビジネスマンの心の究極を説いたことにおいて『都鄙問答』をこえる普遍性をもった書物は他にないという評価がある[33]。梅岩没後，その教学を継承した手島堵庵（1718～1786年）らの門弟によって学塾「心学講舎」を全国15カ国，22舎設立され，月例会が開かれ，講釈の実践が行われた。梅岩が最も重視した徳目は倹約と正直である。私欲を慎み正直に徹して,「先モ立チ，我モ立ツ」商売をせよと説いた。自他の安楽の追求が商売という職分の実践の中に生かされるとき，倹約と正直は職業の倫理となるのである[34]。

「石門心学」は，商人生活と密接に結びついて，金銭第一主義に走りがちな商人に働きかけ，人間として義理・人情をはっきり自覚させ，本来の人間的な面を意識させ，商人の生活態度に深い哲学的な根拠を与えたといえる。商人に商業の技能的陶冶を施したのではなく，むしろ，その内面において商業道徳を深く植えつけ，処世上の高い方針を授けたという意味で，没しがたい功績を讃えなければならない[35]。

Ⅳ 商家の家訓・店則から読み取る商人精神

幕府が全国的な支配を確立する前は，高田屋嘉兵衛らの商人は，しばしば積極果敢で覇気に富む精神で知られていた。士農工商の身分社会が樹立された江戸初期には，茶屋四郎次郎・後藤庄三郎・納屋助左衛門らのすぐれた企業家的豪商が輩出し，元禄期には，豪胆な野心家，紀伊国屋文左衛門らの冒険的・投機的活動は注目すべきである。

享保期（1716～1736年）に入ると，八代将軍徳川吉宗の治世のもとで奢侈生活が取り締まられるようになると事態は急変し，その後は，役人に迎合し，幕府諸藩の支配に誠実に追従する保守的な商人が，むしろ典型的なタイプとなった。商人は，革新者から，従順で控え目な町人へと転換していった。家法・家訓などが商人社会に普及するようになったのは，まさにこうした時期であったといえる[36]。この時期の商家経営は，概して，伝統墨守的な傾向が強く，アイディアの開発と実行，市場の開拓あるいは組織の変革など，創造的・革新的行動は抑制されがちで，商家経営にダイナミズムを失わしめるひとつの要因となったことは否定できない[37]。

わが国では近世商業経営特有の価値意識，制度，慣行が遺産として継承されて近世の家訓・家法・店則となっている。江戸期の家訓の特質として，①本家を中心として分家・別家が協力体制をつくる。②新儀停止（新規の事業には手を出してはならない）と祖法墨守（旧来の慣行を守れ）といった超堅実経営の方針，一業専心を心掛ける。③始末・才覚・算用の精神を明記し，江戸期商人の行動規範を示す。④独断廃止，合議制の採用　⑤長期雇傭制・年功序列制・温情主義という経営家族主義の原点という思想があらわれていた[38]。

家訓の根幹をなす経営思想は，元禄文化を代表する西鶴の作品『日本永代蔵』やその後の梅岩の『都鄙問答』のなかに，その源流ともいうべき考え方がうかがわれる。各商家の家訓に共通して説かれている条目は，「奉公・体面」，「分限」，「始末・知恵・才覚」，「算用」である。家訓には，例外なく「奉公・体面」の「御公儀の法度を堅く守り，お上を敬うこと」が記載された。公儀に対する精神は，国恩奉謝，冥加の精神となり，株仲間のギルド精神にも通じている。次には，神仏の尊崇，親への従順，本業以外の事業をしない新儀停止，旧来の慣行を守る祖法墨守，一業専心の徹底を図り，経営多角化を戒め，危険・冒険を避ける傾向がみられた[39]。

三井家創始者の三井高利が子孫のために残した指針を長男，高平が具体的に細部にわたって家憲化した「宗竺遺書」（1722年）の中で，「奉公・体面」，「主従の道」などを次のように述べている。「一，我家は宗寿より伝へ置かれたる家業相続いたし，今に至るまで益々繁盛すること，是祖先の冥加なるを以て子孫たるものいよいよ有難く存ずべきこと。一，御公儀の御法度，主人はもちろん手代下々迄早速申聞かせ堅く相守るべく，博打，諸勝負等堅く仕る間敷き事。一，同族共益々心を同ふし，上に立つものは下をめぐみ，下たるものは上を敬ふべし（中略）」家業という企業の永続性に関する意識と，それを維持していくための経営者の心がけが厳しく定められており，一種の禁欲的な職業倫理をそこにうかがうことができる。さらに，「たとへ惣

領たりとも，不行跡」の者は勘当することも記述している[40]。明治15年（1882年）に定められた「住友家家法」にある「浮利に走らず」の格言は，住友家の最初の家訓「文珠院旨意書」のなかの「謀計は眠前の利潤たりといえども,必ず神明の罰に当る」の一項に基づき定められた[41]。享保2年（1717年），下村彦右衛門正啓が京で呉服商（現在の大丸百貨店）をスタートし，経営理念として「先義而後利者栄」を掲げた。天保８年（1837年），大塩平八郎，天保の飢餓，大塩の乱，焼き打ちの罹災の中，大丸だけがその難を免れた。大塩が，先義後利を実践していた大丸を，「大丸は義商なり，犯すなかれ」と輩下に命じたと伝えられている[42]。

「始末」は，節約といいかえることもできるが，それ以上の意味をもっていた。「始末」は，資本の効率の増大のため，原料・時間・資金の節約を求める「経済合理性の原則」として解釈さるべきであろう。「知恵・才覚」は，賢明に判断・計画する，敏速・綿密に配慮する。時代がすすむにつれ,「知恵が稼ぎのもと」は，保守的な「銭で銭をもうける」ように変化した。その結果,「知恵・才覚」は，いわゆる「気をきかせる」「おろそかにしない」式の細心な注意と勤勉の効用を強調するようになった[43]。「算用」は，文字どおり疎漏のない計算のことであるが，算盤の技能や正確な計算から，損益の機会の適正な評価，家の繁栄という究極的目標にとってありうべき諸結果の慎重な測定にいたるまで幅ひろい意味をもっていたという[44]。

各商家の「家訓・店則」は，商人精神や商業技術の修業の教科書でもあり，日用常住の中に織り込まれて商人の生活態度を作り上げていく機能を有していたといえる。言い換えれば,「家訓・店則」は，ただ商人としてあるべき姿よりも，さらに踏み行うべき道である人倫・道徳の規定を，より多く定めて，人としてあるべきことを念慮としていたことから，年少者にとっては生活や修業の教科書，年長者にとっては年少者を導くための指導書の役割を担っていたともいえる。

Ⅴ　近江商人にみる商人精神

1　近江商人の心構え

18世紀以後，全国を股に天秤棒を担いで辺境の地まで赴き，先駆的に商業活動を行った近江商人の商人精神は，現在も注目されている[45]。

近江商人の起源については，枚挙にいとまがないほど諸説がみられる[46]。それほど近江商人生成のさまざまな地理的，経済的諸条件等が成り立つといえる。

天秤棒を担いだ小商人の段階にあった近江商人が，どのような心構えでいたか。近江商人の心構えを大別すると，① 禁欲と勤勉，② 社会奉仕の精神，③ 正直，④ 耐忍，⑤ 和合の精神の５項目にまとめることができる。

① 禁欲と勤勉は，自分のことばかりでなく，世の中の一員としての自覚を持って，不義理や迷惑をかけないように絶えず周囲や世間の人々のことを思いやりながら，労苦を厭わず懸命に働けば，立派に商人として認められ，やがて相当の身代を築くことができることを説き，近江

商人の精神をもっともよく表すものということができる。禁欲は「始末」「質素倹約」，勤勉は「精励」「気張る」こととして使用された。「質素倹約と精励」や「始末して気張る」は近江商人を代表する精神である。② 社会奉仕の精神，これは，「陰徳善事」「陰徳の積善」の語で表されている。仏教の因果応報の思想に基づいた「喜捨」や「施与」の語と同義語である。天秤棒精神は，ただ汗水たらしてひたすら「気張る」だけではなく，社会の一員としての自覚を忘れず働くことを意味していた[47]。

③ 正直，これは「信用」，この信用を生み出すものが「正直」「誠実」の精神や倫理である。商人にとって「正直」が「精励」や「倹約」と対等あるいはそれ以上に位置づけられている。異郷での商業の成功にとって不可欠だった信頼の構築は，あくどい商業をせず，薄い口銭，売って悔やむ，正直，信用，出精専一（商売専心）等々を大切にする行動洋式を生んだ。④ 耐忍，この語は仏教語であり，仏教の経済倫理でもある。⑤ 和合の精神，これも仏教の経済倫理である[48]。

なお，近江商人以外の伊勢商人，富山商人，京都商人，博多商人，大坂商人にしても，名を成した商人たちのモットーは共通しており，信用，忍耐，倹約，才覚，情報である[49]ことを付しておきたい。

2 近江商人の「三方よし」の精神

「三方よし」の精神をはじめて書き残したのは，近江国神崎郡石場寺の麻布商中村治兵衛である。宝暦４年（1754年），15歳の養嗣子である宗次郎宛の書き置きのなかの一節がよく知られている。「たとへ他国へ商内に参り候ても，この商内物，この国の人一切の人々皆々心よく着申され候ようにと，自分の事に思はず，皆人よきようにと思ひ，高利望み申さず，とかく天道のめぐみ次第と，ただその行く先の人を大切におもふべく候，それにては心安堵にて，身も息災，仏神のこと常々信心に致され候にて，その国々へ入る時に，右の通に心さしを起こし申さるべく候事，第一に候」[50]。

上記原文を訳すると，「たとえ他国へ行商に出かけても，自分の持ち下った衣装等をその国のすべての顧客が気持ちよく着用できる様にこころがけ，自分のことよりも先づお客のためを思って計らい，一挙に高利を望まず，何事も天道の恵み次第であると謙虚に身を処し，ひたすら持ち下り先の地方の人々のことを大切に思って商売をしなければならない。そうすれば，天道にかない，身心とも健康に暮らすことが出来る。自分のこころに悪心の生じないように神仏への信心を忘れないこと。持ち下り行商に出かけるときは，以上のような心がけが一番大事なことである。」と読むことができる。この一節は，後の多くの近江商人の家訓類の精髄であるとされている。

「三方よし」（売り手よし，買い手よし，世間よし）の行動様式は，今日的な課題であるCSR（Corporate Social Responsibility 企業の社会的責任）と結びつけて注目されている。世間を現代

の経済社会に置き換えると，地球環境，地域社会，コミュニティともいえよう。今日の多発する企業不祥事を見るにつけ，営利行為にともないがちな倫理観の欠如を防止するには，近江商人の「世間よし」の視点をより再認識していく必要がある。

なお，近江商人の心構えである陰徳善事，耐忍，和合の精神などや「三方よし」の精神の形成は宗教的経済倫理をバックボーンにしているのではないかと考える。近江商人を多発させた地域特性としての宗教的背景をみると，滋賀県下の仏教寺院は，浄土真宗が多い。ついで多いのが，八幡商人や日野商人，五箇荘商人などの仏教寺院である浄土宗である。浄土真宗と浄土宗，浄土教諸宗派で全体の３分の２以上を占めている。近江商人の特有な経済倫理を生み出す根底，あるいは基層に，宗教意識を指摘する[51]見解がある。浄土真宗においては，職業は，自己の封建領主に対するよりも，主として阿弥陀仏への義務としての報恩とみなされる。宗教的義務が君主に対する政治的義務に優位性を保っている[52]ことは注目すべき見解である。

Ⅵ　企業家精神の生成と唱導した人物

１　商人精神から企業家精神への転換

江戸期においては，商人としての仕来りがあり，社会のあらゆる事柄について故例・格式にこだわりが伴った。封建時代には社会各階級層に，世襲制度，営業の自由権は認められなかった。祖先伝来の仕来り，伝統，慣習を保守するこだわりがあった[53]。

江戸初期に出来上がった商業の仕方なり機構なりは，江戸中期・後期を通じて根本的な点で変化はなかった。それに対応する商人意識や商人精神もほとんど変化がなかったといわれる。商人としての根本的な心がまえ，すなわち商人道や商業経営の方法に関する思想の根本においては，西鶴や三井高利の時代と如見や梅岩の時代とのあいだいに決定的な発展はなかったといってよい。

江戸末期にいたっても，近代的意味の企業はほとんど存在しなかった。生産の大部分は零細農業が占め，工業もまだ家内的手工業段階にあって，民間商人に残された活動分野は，大体小売商的規模に限られていた。幕末という時代背景が商人をより保守化させ，企業家として大切な進取性を発揮させることができなかった。江戸期に，幕藩体制と密接に発展，存在していた近世の巨商と見られた商家は，ほとんど例外なく，江戸後期には利益率は減退し，資産内容は不良資産を含んで悪化し，経営は動脈硬化を起こして活動力を失っている。三井でさえ，最後の最後まで幕府方か朝廷方につくか迷い，三井の行末を案じ，追い詰められて朝廷についた経緯がある。大阪でも，トップクラスの商人は，鴻池，住友を除いてほとんど没落していった。倒産と没落を避けられたのは人的条件であった。三井では大番頭の三野村利左衛門，住友では子飼いの広瀬宰平がこの過渡期を乗り切ったとされる[54]。

明治維新の変革に際して，近代企業としての紡績・鉄道・造船・製鉄・製紙・製粉・セメント・電力・銀行・保険などの分野をとってみても，これまでの商人的採算性，経験性の基準か

らは起業・経営の余地がなかった。そこに，溌剌たる企業家精神の育成，発達する客観的素地はほとんどなかったといえる[55]。当時は，福沢諭吉などの啓蒙的述作は一般に読まれたが，影響は主として一部の知識的商人に限定され，普通の商人においては，明治維新の動揺から生じた刺激の方が大であり，その動揺に適応するためには，むしろその救済を旧思想に求めていたといわれる[56]。

日本の近代企業が成功するか否かは，科学技術を理解し吸収するとともに，企業家たることに自信と自負をもつような，進取的企業家精神を有する人材の育成が欠かせなかった。従来の商人道とは違って，何よりも科学技術の理解が必要であった。賤商意識を基礎づけていた従来の朱子学的な儒教の教義の解釈をしなおす必要があった[57]。

明治期に入り，日清戦争後における工場工業勃興の結果，商人の地位は，次第に弱勢となった。商人の名が漸次廃れ，これに代わって実業家または紳商の名が用いられるに至った[58]。

日本の近代企業を指導すべき理念は,「士魂商才」といわれた武士的な国家的意識を伴った個性的な企業家精神であった。「士魂商才」とは,文字どおり士族の道義を尊ぶ精神とビジネスの能力・活動を接合した態度や行動様式をさした言葉である。

「士魂商才」によるナショナリスティックな理念こそ,明治初年から中期にかけて士族をはじめかなり広い階層の近代企業の設立・経営に対する積極的な動機となり，国家意識・国際感覚をもつビジネスは，江戸期以来の商人的ビジネスとはまったく違った実業として，産業社会の成立期の社会的承認をうけたものであった。

江戸期における伝統的商業から近代的企業の架橋を可能にした実業概念を唱導し，企業家にふさわしい新身分の創造という点で顕著な貢献をした代表的な人物[59]として福沢諭吉と渋沢栄一を取り上げ，以下，彼らの進取的企業家精神を考察してみたい。

2　福沢諭吉が唱導した企業家精神

福沢諭吉（1835～1901年，以下福沢という）の主著に『西洋事情』（1866年初刊),『学問のすすめ』（1972年初刊),『文明論之概略』（1975年刊）がある。福沢の思想には二つの柱がある。一つは，国民全体の智徳を高め日本社会の文明化をすすめること，もう一つは，アジアにおいて欧米列強の植民地拡大の動きがはげしくなろうとする時に，日本の国家的独立を全うすることであった[60]。

明治新政府は，現実的な政治目標である近代工業化政策として殖産興業政策，西洋の科学技術・近代的諸産業の移植，欧米と比肩する富国の実現，国権の確立を掲げた。

明治７年になっても日本の対外貿易は，輸入の99.97％，輸出の99.45％が外国の諸会社によって握られていた現状[61]に危機感をもち，日本国を富強にするには商工業の発達，貿易を盛んにしなければならないというのが彼の持論であった。

福沢は，日本の急務は富国強兵にあり，その源泉は人物養成にあるという。「知足安心」的な

現状満足の人生観を批判し，祖法と家業にしがみつく古いタイプの商人から脱皮し，優れた智と徳を受け継ぐ士族出身者が国家のための実業の先頭に立たなければならないと主張した。事実，1863年から1871年までの福沢創立の慶応義塾の入学者総数1,329名のうち士族出身者が９割強を占め，多くの人材を実業界へ輩出している。士族は，外国資本の対抗手段としての資本蓄積に，武士道の教える倫理的規範（仁義を先にし，利を後にする）との近親性を見いだしたといえる[62]。

福沢が考案した造語である「尚商立国論」には，四方を海で囲まれた日本が，商工業で国富を築く道筋を示している。３年後に出版された『実業論』の中で，「実業」が社会全体の原動力となって立国の途を拓くと主張している[63]。「実業」という言葉も福沢の造語で，明治初年まず殖産興業政策，特に西洋の科学技術・近代的諸産業の移植の過程における実地教育や技術伝承事業の場で，実務や実地技術を重視するところから使用され始めた。福沢のキャッチフレーズは，「士魂商才」，これこそが，福沢が西洋の文明の精神に比定すべきものとして新たに日本の「実業」の精神に位置づけようとしたものであった。実学を修得して「活発敢為」「好んで困難を行う」「士魂商才」の主張を通じて独立進取の主体的・革新的企業家精神を理論的に創造した[64]。福沢は，不合理の権化ともいえる武士道精神を大いに評価し，これぞ日本人の魂とまで言い放った論文がある。それが「福沢武士道」といわれる「痩我慢の説」（明治24年に書き，10年後明治34年発表）である。ここでは武士道という言葉は使ってはいないが，国家を築くのはこの痩せ我慢を持った個人であると述べている[65]。明治武士道の精神は，個人的道徳観としての独立独行をもたらす「気概」の精神として受け入れられた。

福沢により「士魂商才」と表現された実業論は，江戸期における商人の商家経営を明治の企業家精神に転化させ，商家経営の理念の枠内にとらわれない学識教養ある新人材の導入を可能とさせ，経営の近代化と専門経営者としての成長を準備する論理と倫理を創造することになったといえる[66]。同時に，福沢は実業人は品格を備えた人物でなければならない，つまり士族でなければならないとも述べている。「蓋し実業は貴重にして栄誉の事なり，其の事にして欺の如くなれば，之に当たる人も亦欺の如くならざる可らず。人品高尚にして廉恥を知る人にして始めて可なり。到底今の所謂職人輩（やから）に任す事柄に非ざればなり」[67]。福沢は，企業家精神の在り方として，全社会の先導者として気品の泉源・智徳の模範に相応しく振る舞うべきであると説いている。

３　渋沢栄一が唱導した企業家精神

渋沢栄一（1840～1931年，以下渋沢という）は，第一国立銀行・王子製紙・大阪紡績・東京瓦斯など約500社の設立や商業会議所・銀行集会所などの経済界の組織作り600余に関与し，実業界の指導的役割を果たし，「日本近代資本主義の最高指導者」とも称せられている[68]。ドラッカーは，渋沢について，「彼は世界のだれよりも早く，経営の本質は，「責任」ということを見

抜いていた」と高く評価している[69]。渋沢の思想体系は,「商業立国」の理念を掲げ,賤商意識を基礎づけていた朱子学的儒教教義を批判し,商末・抑商思想が存在しない儒教の大本である『論語』を拠り所とした。欧米列強の具体的脅威のもと,『論語』により忠実であることによって「近代資本主義の精神」を主張した。明治6年に自称商売人になって以後,「商業立国」論は彼の生涯を貫流する基本理念となる。渋沢は,「国旗光彩」論を展開する中で,「商売其他事物の進歩は其根本は何にあるか,即ち人にあると云う事は申す迄もない事である」と,国旗の光は商業による,商業は人によると述べて,究極においては「商業立国」の人づくり論へと展開させている。最後は人の問題であるという点は福沢と同様である。

彼はどのような人を念頭に置いたのか。その人づくりの内実が問われる。その一は,商工業者に武士道の精神を求めた。仁義の上にたった富の追求,論語と算盤説を唱え,武士道ならぬ実業道を求めた。徳川時代の文武の官僚の生き方である武士道から実業道へという道徳上の革新を成し遂げ,つねに求道を怠らぬ精神,倹約と忍耐,果敢と勇気,賢明を挙げること,下問を恥じぬ精神をもとめた[70]。士魂商才については,「人間の世の中に立つには武士的精神の必要であることは無論であるが,武士的精神のみに偏して商才と云ふものが無ければ経済の上からも自滅を招くやうになる故に,士魂にして商才が無ければならぬ」と訴えた[71]。武士道の精神については,いくつかの語録が見受けられる。「武士道の範囲を広くして,単に父君に尽すとか或は生命を捨てるとかいう場合にのみ限らず,すべて至誠を基として苟も道理に適ふたことであれば一歩も動かぬといふ決心を持するのを武士道と称して宜くはないかと考へて居る」[72]。その二は,その武士道は立身を目的とするものではなく国家社会の基礎づくりに生きることを求めた。渋沢には,梅岩と違って,国家という観念が重要であり,私利と公益の結節点には国家があった。渋沢自身は,自己の生涯を通じて,国家の観念から事業をなして公利公益を追求してきたことを,誇りをもって語っている[73]。道徳を以て人生の最高目的とし,私利追求,資本蓄積は道義に合致し得るもの,すなわち「道徳経済合一説」を一貫して主張し続けた。渋沢の企業家精神の根本理念は,営利の追求手段はあくまでも道義に一致するもの,フェアプレーでなければならぬという義利両全・道徳経済合一論を唱導した。

4 両者の企業家精神の異同

福沢と渋沢の思想は,表面的にみるかぎり対照的であった。一般に,福沢の西欧的功利主義と渋沢の儒教倫理とのコントラストを強調する論者が多い。福沢は,江戸期以来の儒教での利を軽んずる意識こそ,日本の社会の進歩・発展を阻害するものとしてとらえた。儒教的な物事の見方・考え方を排撃し,イギリスの自由主義経済学とB・フランクリン流の職業倫理を適宜に合成して,実業革命を説いた。彼は,業績をもって人間の価値の基準とすべきとし,希求と能力をもつ青年たちを教育して,文明開化の進歩を体現する実業家の養成に努めた。

これに対し渋沢は,朱子学的儒教教義を批判するも,商末・抑商思想が存在しない儒教の大

本である『論語』を拠り所としている。福沢に比べ西洋の経済学や自由主義思想の知識に乏しく，多分に儒学的教養と伝統的価値にコミットしていたから，仁義道徳とビジネスの両立（彼のいう生産殖利）を求め，実業家は国家目的に寄与するビジネスマンでなければならないことを強調した[74]。（道徳経済合一説，論語算盤説）

また，私利と公益の関係について，福沢は，私利と公益を区別した上で，両者の統合を図る。富国強兵による日本の独立を希求し，商工業の発展によって国を富ませるために，その資本として富豪の資産に期待をかけた。その際，富豪の国家的観念や道徳心を一切当てにしていない。私利私欲でたくわえた資産が国家公共のために役立てば，それでよいと考えた。私欲に基づく殖産家の蓄積を立国富強の公益につなげるものは，高等教育を通じて文明の知識と富国強兵思想を身につけた士流学者の実業人であると説いた[75]。これに対し，渋沢は，営利の追求，資本の蓄積のために手段を選ばないと考えることはできなかった。道義，仁愛の人情，民主主義の行方，合理的なもの，フェアプレーでいくものでなければならぬというのが，渋沢の考え方である。道義的生き方が至上命令あるいは第一義であり，渋沢の人生哲学のバックボーンであったといえる[76]。

渋沢は，福沢が三菱と結びあったことに反発した。より本質的には，渋沢が儒教主義を提唱，福沢は儒教を「腐儒の腐説」として排斥したことへの不満もあった。福沢が死没した後の1917年，渋沢は，福沢とは意見を異にすることを明確に表明した。西洋学派の学者である福沢と，東洋流の思想に依拠しようとする渋沢とは，所詮永炭相容れないものがある。渋沢は，福沢に敬意を表しつつも衷心よりの傾倒はしていないと述懐している[77]。

両者の思想には一致点も見出すことができる。福沢と渋沢は江戸時代以来の心学の商人道と近代の国益のための企業家精神との間に断絶があったと主張する。彼らは，出版物のもつ啓蒙効果についての認識において，福沢と渋沢は一致していた。明治維新を一大変革とみなし，その前後を非連続の関係として解釈する。

福沢は，武士道精神を大いに評価し，「士魂商才」の実業論が，江戸期における商人の商家経営を明治の企業家精神に転化させたと主張している。渋沢は，「武士道すなわち実業道なり」の信念に立ち，「士魂商才」を提唱した。両者は実業精神の概念の形成を通じ，企業家の革新的で合理的な武士道精神について共有の考えを見出すことができる。

Ⅶ　むすび

わが国における企業家精神は，江戸期との連続的な発展のうえにある一切を強く打破することによって生成したという見解がある[78]。商人精神から企業家精神への断絶・非連続の主張が主流の中，本稿では，敢えて新たな企業家精神としての連続・継承論の検証を試みてむすびとしたい。

筆者は，企業家精神を「つねに進取の態度をもち，自らの危険負担において，たえず積極的

な革新的行動をもたらしていく機能ないし個人的特性をいい，その根本精神において，単なる利潤動機だけで行動する経営主体ではなく，高い倫理観，公益観を兼ね備えたものでなければならない。」という概念づけを試みた。

江戸期の商人は，常に道徳的なものによって律せられ，それを混然と含蓄し，あるいは経済よりも倫理を優位に置いて生きていた。江戸期の商人は理想としては，人としてあるべきことを第一義に考えていたといえる[79]。江戸期の寺子屋の教科書としても使用された「商売往来」は，日本商人の文字学習の伝統として，江戸期から明治期へと連綿と継続していった。元禄期以来，長期にわたって商人世界の中で愛用され，読み書き能力の形成だけでなく，商人に必要な知識や生活心得を学習させるのに役立った。

典型的な事例を明治期の教科書にみることができる。明治６年刊橋爪貫一著『世界商売往来補遺』の末尾の一節に見ると，元禄本の引写しである。この現象は，時代が下がっても変わっていない[80]。「商売往来」は，近世中期から明治10年代にいたるまで，200以上の版を重ね，出現から180年間，生活心得は，ほとんど変革がみられなかった。

明治22年に創立された東京商業学校で使用された「商業道徳教科書」の第１章「信用ヲ得ルニ必要ナ諸徳」の中で，正直，専心，自助，忍耐，勤勉，節倹，礼容の７徳目をあげている。渋沢も企業家のあり方として『論語』を持ち出し，五倫五常の道を説いている。次に，「石門心学」は，明治期になってからも命脈を保ち，その教えは，人間の「道」「心」として，国民的な倫理観，職業観の底流をなし，日本の近代社会，企業経営の中に生き永らえている[81]。

また，雇傭制度であると同時に商人養成のための訓練システムでもあった「商業徒弟制度」は，明治期に入ってからも，わが国の企業者の供給源として，伝統的人材供給システムという装置として大きな機能を担っていった。特に，貧困家庭出身者かつ低学歴者（当時の掲載時の社名で表すが，例えば，松竹会長の大谷竹次郎，江崎グリコ社長の江崎利一，ヤンマーディーゼル社長の山岡孫吉，山種証券社長の山崎種二，早川電機工業社長の早川徳次，丸善社長の司忠，松下電器産業相談役の松下幸之助，蛇の目ミシン工業社長の嶋田卓彌，本田技研工業社長の本田宗一郎，吉田工業社長の吉田忠雄，伊藤ハム栄養食品社長の伊藤傳三など）にとって，丁稚奉公という徒弟修業の機会は，企業家精神の形成に大きな役割を果たしていたといえる[82]。

今日，京都の産業界では梅岩の石門心学に傾倒する経営者が多い。その一人，京セラの稲盛和夫氏がいる。日本でも資本主義が生まれようとするとき，企業は正義を追求すべきであり，企業家は高い倫理観を持つべきであると主張する。明治の実業家である安田善次郎は，近江商人の「勤勉」，「節約」，「奉仕」を範とすべきだと説いている。金原明善は，伝統的な儒教の教える修身，斉家すれば足りるとし，「勤労・節倹・忍耐」をもって三徳目とした。

住友グループの「浮利をおわず」の社訓は，江戸時代以来の住友家の家訓の骨子であるが，実は『都鄙問答』のなかの商人道の命題の一つであった。現代の大会社で重視されている「和」や「協力」の精神や，「奉仕」「感謝」「勤倹節約」「諸事公明」「誠意奉仕」などを「社規」「社

訓」「心得」として掲げるところとなっている。さかのぼれば「石門心学」の日本の経営の伝統といってよい。『都鄙問答』は，日本の経営の道の究極を説いた書物としても評価できる。明治後期のリーダーたちも，経営にさいしては「協力」「和」を呼びかけ，人間の関係，心の結合を重視した。三菱の創始者，岩崎弥太郎は，社内には「団結」，社外には，「奉仕」をモットーとした。渋沢が，国家・公共のための新しい産業の創設，在来の心学や商人道に関心が乏しかったが，論語を経典とし，正義・誠実・廉直・礼節にかなわなければならないと主張している。戦後の初代経団連会長の石川一郎は，渋沢を「清華先生」と称し，尊敬し，戦後経済界の指揮者としての究極の信条を「至誠」として終始一貫した。今日の多くの企業で，「勤倹節約」「質実剛健」「諸事公明」「誠意奉仕」などの企業の精神が,「社規」「社訓」「心得」として掲げられている。

江戸期の商業経営は明治維新と共に，資本主義，近代化の波にさらわれて，一度死んだといえよう。しかし，死に絶えたのではなく今も執拗に生き続けているといえのではないか。江戸期における経済と倫理の含蓄的な統合は，明治以降の資本主義の社会において一度は分裂し，経済行為は倫理の外にあるものとして純化し，実業家意識は営利・競争・自由・利己をその要素としたと理解すべきではないかと考える。

いまや再び経済と倫理とは統一され，その止揚のうえに，和合・奉仕・誠実・公益・信仰を要素とする新しい企業家精神を生まなければならないと考える。

江戸時代の人倫道徳を念願とした商人意識及びその具現としての心学，家訓・店則が，これからのわが国の企業家精神・企業倫理の形成上，他山の石として大いに参考とすべきではないかと考える。

注

1）弦間明他監修，日本取締役協会編『江戸に学ぶ企業倫理』生産性出版，2006年，13頁。
2）土屋喬雄『日本経営理念史』日本経済新聞社，昭和39年，77頁～78頁。
N.S.Gras,Henrietta M.Larson,『Casebook in American Business History』1939，参照。
3）太田一郎『企業家精神の生成』多賀出版，1996年，40～43頁参考。
「企業家精神」の語については，岩波書店の『経済学辞典』によれば，entrepreneurship（英），Geist des Unter-nehmers（独）とあり，一般に英語では entrepreneurship と entrepreneurial spirit が混合して用いられている。清成忠男氏は entrepreneurship は企業家活動と訳すべきだと主張している。
4）P.F. ドラッカー，小林宏治監訳，上田惇生・佐々木実智男訳『イノベーションと企業家精神』ダイヤモンド社，1985年，35頁，Peter F. Drucker,『Innovation and Entrepreneurship』1985
5）J.A.Schumpeter,『The Theory of Economic Development』,1937.Edited by R.H.Campbell & R.G.Wilson,『Entrepreneurship in Britain』1750-1939, pp.38～42.Adam & Charles Black,London，1975，参照。
6）清水龍瑩「企業家精神と管理者精神」『三田商学研究』25巻1号，1982年，12頁。
7）中西寅雄「経営構造の変化とトップマネジメントの役割」『中西寅雄経営経済学論文選集』千倉書房，1980，225頁。
8）バーナード『経営者の役割』山本安二郎・田杉競・飯野春樹訳，ダイヤモンド社，1972年，295頁。
Barnard,Chester I『The Functions of Executive』1938，参照。
9）尾形裕康『日本教育通史』，早稲田大学出版会，昭和38年，153頁。

10) 教育史上に特筆すべきことは，長い歳月にわたり学校教育から締め出されていた女児を，江戸時代の寺子屋が初めて受け入れたことは注目すべきことである)。
11) 高橋敏『江戸の教育力』ちくま新書，2007年，21頁。
12) R. P. ドーア　松居弘道訳『江戸時代の教育』岩波書店，1996年，233頁。
Dore, Ronald Philip『Education in Tokugawa Japan』1965, 参照。
13) 富士山東麓の駿河国東郡麓吉久保村（現静岡県小山町）湯山文右衛門が40年にわたって営んだ寺子屋の鉄則，「子供礼式之事」などが知られている。
14) 尾形裕康『前掲書』153頁。
15) 高橋敏『前掲書』41～77頁。
16) 弦間明他監修，日本取締役協会編『前掲書』48頁。
17) 浜田陽太朗等編著『近代日本教育の記録』日本放送出版協会昭和53年，15頁。明治16年，政府は全国にわたり寺子屋調査，『日本教育史料』に収めて公表，校数13,816校，寺子数740,892人（男592,754人，女148,138人)。
18) 豊田俊雄編著『わが国産業化と実業教育』国際連合大学，1984年，14頁。
19) R. P. ドーア　松居弘道訳『前掲書』244頁。
20) 宮本又次，中川敬一郎監修『江戸時代の企業者活動』日本経営史講座第１巻，昭和52年，221頁。
21) R. P. ドーア　松居弘道訳『前掲書』244頁。
22) R. P. ドーア　松居弘道訳『前掲書』245頁。
23) 宮本又次，中川敬一郎監修『前掲書・江戸時代の企業者活動』223頁。
24) 土屋喬雄『前掲書・日本経営理念史』129頁。
25) 土屋喬雄『前掲書・日本経営理念史』135頁。
26) 土屋喬雄『前掲書・日本経営理念史』151頁。
27) 林周二『現代の商学』有斐閣，1999年，269～271頁。
28) 奥村恒夫・奥村紀夫『商業教科教育法』大明堂，昭和48年，44頁。
29) 土屋喬雄『日本の経営者精神』経済往来社，昭和34年，32頁
30) 土屋喬雄『前掲書・日本経営理念史』196頁。
31) 伊藤雅俊他『商いから見た日本史』PHP 研究所，2000年，124頁。
32) 土屋喬雄『前掲書・日本経営理念史』140頁。
33) 由井常彦『都鄙問答』日経ビジネス人文庫，16頁。
34) 三好信浩『渋沢栄一と日本商業教育発達史』2001年，119～120頁，『日本商業教育成立史の研究』45～49頁。
35) 武市春男『商業教育論』国元書房，昭和44年，48～49頁。
36) J. ヒルシュマイア，由井常彦『日本の経営発展』東洋経済新報社，昭和57年，46頁。
37) 藤田貞一郎・宮本又郎・長谷川彰『日本商業史』有斐閣，1978年，142頁～143頁。
38) 作道洋太郎『日本経営史』ミネルヴァ書房，1980年，65頁。
39) 宮本又次他監修『前掲書』（作道洋太郎，Ⅱ江戸時代の商家経営）73頁～74頁。
40) 土屋喬雄『日本資本主義の経営史的研究』みすず書房，昭和29年，14頁。
41) 廣瀬久也『信仰と商い』朱鷺書房，1999年，227頁。
42) 山本眞功監修『商家の家訓』青春出版社，2005年，119頁。
43) J. ヒルシュマイア，油井常彦『前掲書・日本の経営発展』，47頁。
44) J. ヒルシュマイア，油井常彦『前掲書・日本の経営発展』，48頁。
45) ３～４貫目の持荷を天秤棒に掛けて1年に千里歩行した記録もある。
46) J. ヒルシュマイア，油井常彦『前掲書・日本の経営発展』，46頁。
47) 末永國紀『近江商人』中公新書，2000年，196～201頁。
48) 芹川博道『日本の近代化と宗教倫理』多賀出版，1997年参照
49) 脇本祐一『豪商たちの時代』日本経済新聞社，2006年，109頁。
50) 末永國紀『近江商人学入門』サンライズ出版，1994年，13頁。
51) 芹川博道『日本の近代化と宗教倫理』多賀出版，1997年，225～229頁。
52) ロバート・N・ベラー『徳川時代の宗教』岩波文庫，183頁。
Robert N.Bellah,『Tokugawa Religion』1957, 参照。
53) 奥村恒夫・奥村紀夫『前掲書』51～53頁。

54) 中川敬一郎ら『近代日本経営史の基礎知識』安岡重明稿，1990年，11～12頁。
55) 高橋亀吉『日本の企業・経営者発達史』３～７頁。
56) 宮本又次『宮本又次著作集』第２巻「近世商人意識の研究」講談社，昭和52年，297頁。
57) 中川敬一郎・由井常彦編集「財界人思想全集第１巻『経営哲学・経営理念』18～19頁。
58) 宮本又次『宮本又次著作集』第２巻「近世商人意識の研究」講談社，昭和52年，312頁。
59) J. ヒルシュマイア，土屋喬雄，油井常彦訳『日本における企業者精神の生成』東洋経済新報社，昭和40年，139～147頁。
60) 藤森三男「福澤諭吉と実業の精神」『三田商学研究』32巻５号，1989年，78頁。
61) J. ヒルシュマイア，土屋喬雄，油井常彦訳『前掲書・日本における企業者精神の生成』30頁。
Johannes Hirschmeier, ,『The Origins of Entrepreneurship in Meiji Japan』，1964，参照。
62) 山本久美「企業の利害と社会・文化的価値観に関する研究」『三田商学研究』第40巻第3号，1997年，164頁。
63) 弦間明ほか『明治に学ぶ企業倫理』生産性出版，2008年，76頁。
64) 浅野俊光『日本の近代化と経営理念』日本経済評論社，1991年，110～112頁。
65) 岬龍一郎『新・武士道』講談社，平成13年，167～168頁。
66) 浅野俊光『前掲書』，112頁。
67) 千種義人『福沢諭吉の経済思想』同文館出版，1994年，457頁。
68) 土屋喬雄『渋沢栄一』吉川弘文環人物叢書，270頁。「実業王」「財界世話人」「財界の大御所」「財界の太陽」と呼ばれた。
69) P.F. ドラッカー，野田一夫・村上恒夫監訳『マネジメント』全２巻，ダイヤモンド社，1974年，６頁。
Drucker,『Management Tasks,Responsibilities,Practices』1974，参照。
70) 梅津順一『渋沢栄一における武士道と実業道』65～69頁。
71) 三好信浩『渋沢栄一と日本商業教育発達史』風間書房，2001年，107頁。
72) 三好信浩『前掲書・渋沢栄一と日本商業教育発達史』106～107頁。
73) 三好信浩『前掲書・渋沢栄一と日本商業教育発達史』120頁。
74) 宮本又次，中川敬一郎監修『工業化と企業者活動』日本経営史講座２，昭和51年 由井常彦稿 33頁。
75) 森川英正『日本の企業と国家』日本経営史講座４Ⅱ 渋沢栄一―日本株式会社の創立者― 72頁。
76) 土屋喬雄『前掲書・渋沢栄一』274頁。
77) 三好信浩『前掲書・渋沢栄一と日本商業教育発達史』177～178頁。
78) J. ヒルシュマイア，土屋喬雄，油井常彦訳『前掲書・日本における企業者精神の生成』13頁。
79) 宮本又次『宮本又次著作集』第２巻，322頁。
80) 三好信浩『商売往来の世界』日本放送出版協会，昭和62年，201～202頁。
81) 堺屋太一『日本を創った12人』PHP 文庫，2007年，180頁。
82) 安岡重明編『近代日本の企業者と経営組織』同文舘出版，平成17年，５～40頁。

〔付記〕
本稿は，第23回（財）シキシマ学術・文化振興財団研究助成金による研究成果の一部である。